

第6章 まとめ

前章までで述べてきた両遺跡の調査成果について概観し、まとめとしたい。

松谷中峯遺跡については、B区は全体的に果樹園造営のため、大規模に搅乱を受けていたが、古墳時代中期の竪穴建物2棟のほか、溝状遺構2条、落とし穴と考えられるものを含め土坑21基、ピット9基を検出した。また、造成時の客土中からも古墳時代中期の時期を中心とする土器のほか、砥石・土錐などが出土していることから、造成によってその痕跡は失われてはいるが、B区丘陵上には古墳時代中期の集落が形成されていた可能性を考えた。また、時期の特定できなかった土坑に関しては、落とし穴状土坑など、縄文時代のものと考えられるものも認められたが、該期に相当するような遺物の出土は認められなかった。

それに対し、A区では、B区とほぼ同様の地形であるにもかかわらず、人の利用した痕跡は確認できなかった。近年鳥取県下では、道路敷設工事などの開発に伴い、大山町及び淀江町に所在する妻木晩田遺跡（大山町教育委員会・淀江町教育委員会2000）や東伯町笠見第3遺跡（鳥取県教育文化財団2004）などの大集落をはじめとする、様々な性格の遺跡が、大山裾野から派生する丘陵上に確認されているが、それとは別に、開発に伴う試掘調査の結果、人的関与の痕跡が認められず、遺跡として調査されない丘陵も多く存在する。

松谷中峰遺跡では、人が利用する土地、しない土地という状況を端的に示している様子が確認できた。今後当時の土地利用のあり方を検討する上での良例となると考える。

別所中峯遺跡では、時期の特定できたものとして、弥生時代末から古墳時代前期にかけての遺構が確認された。

この、弥生時代末～古墳時代初頭にかけての時期には竪穴建物2棟のほか、貯蔵穴と考えられる土坑1基、底面に土器が並べられ、何らかの儀礼が執り行われたとみられる土坑1基（SK13）が確認された。竪穴建物については、当遺跡が尾根の先端部に立地することから、調査区外尾根の南側に集落の中心が存在するという想定も可能である。しかし、調査区南側に行くに従って該期にあたる遺構・遺物の分布が希薄になっていくこと、竪穴建物の構造が小型であったり、柱穴の確認できないものであったりと、特異なものである可能性があることから、これらは居住するためのものではなく、儀礼跡と考えられるSK13に関連した特殊な施設であった可能性を指摘しておきたい。上記の時期よりやや降ると考えられる竪穴建物1棟（SI3）も他に該期の遺構がみられず、分布としては散在的なものであると考えられるので、同様な性格のものであると思われる。

時期の特定できなかった遺構としては、土坑11基、段状遺構1基、溝状遺構2条が検出された。このうち土坑1基は底面にピットをもつ、いわゆる落とし穴状遺構で、表土中より縄文時代前期及び晩期の土器が出土していることから、これらいずれかの時期の所産であると考えられる。

検出した土坑のうち8基は、明瞭な被熱痕がみられる焼成土坑で、焼成部位の特徴から、製炭土坑であると判断した。当例のように土坑の焼成部位の特徴によってその性格が推定できる可能性があることから、今後同様な遺構の調査において、詳細な焼成部位の記録が望まれる。これらの内2基の底面に溜っていた炭について放射性炭素年代測定を行ったところ、どちらもほぼ7世紀後半から9世紀初頭のなかに収まる可能性が高いという結果を得た（註1）。おそらくこれらに付随する施設であると考えられるSS1を含め、すべての製炭土坑がこの年代の中に収まるものであろう。隣接する東伯町八橋第8・9遺跡では、7世紀後半代の竪穴建物跡（SI1・4）や、南谷部包含層を中心に精鍊鍛冶

に関係すると考えられる鉄滓が出土しており（註2）（鳥取県教育文化財団2004）、当遺跡SI1埋土上層より出土している椀状鍛冶滓とともに、この近辺で鍛冶関連施設の存在を伺わせる資料が揃いつつある。今回確認された製炭土坑群は、この鍛冶関連施設で使用する炭を得るためのものであると考えられる（註3）。また、これら製炭土坑のうち4基（SK1・3・6・11）の焼土について、被熱温度を調べるために理化学的分析を依頼したところ、どれも200℃以下の低い温度による持続的な被熱を受けたものであるという結果を得た（註4）。一般的に簡易な伏せ焼き法でもって製炭を行う場合、窯内の温度は、焼成温度の低い黒炭を焼く場合でも最高700℃に達するそうである。今回検出したものもおそらく伏せ焼き法に近いものであると考えられるが、他に同様な資料に対する分析が為されていないため、現段階ではこの分析結果をどのように解釈すればよいのか判断できなかった。今後製炭土坑とは別の性格をもつ遺構であるという可能性も視野に入れつつ、同様の資料に対する類例の蓄積や、当時の炭焼き法の復元・分析手法の妥当性など、様々な角度からの検討が必要であると考える。

方形に巡る溝（SD2）については、SK13よりも新しい時期のものであると考えられることから、製炭土坑に伴うものである可能性がある。しかし、現在までのところ、同タイプの製炭土坑に溝が巡る例はなく、極めて短期間の操業であったと考えられる製炭土坑に、果たして溝で囲むというようなことをしたのかどうかも疑問である、今後の類例の増加を待ちたい。

以上、松谷中峰遺跡・別所中峯遺跡とも、検出された遺構は少数ではあるが、何点か重要な成果が得られた。これらについては特に論考を用意すべきであるが、時間的制約及び紙数の制限上果たすことが出来なかった。また、遺構それ自体にも十分な検討を加えることが出来ず、ひとえに調査担当者の力量不足であると痛感している。今後別の機会を持ってその責を果たしていきたい。

（鍋倉・大野・福井）

《註釈》

- 1) 本書第5章第2節参照
- 2) 調査担当者である小口英一郎・北島大輔・原あづさ3氏に御教授いただいた。
- 3) 穴澤義功氏は伏せ焼き式木炭窯について、5世紀末からみられる、カロリーは低いが燃焼性に優れた鍛冶用の木炭を製炭したものとしている（穴澤2003）。穴澤氏の説に従えば、別所中峯遺跡の製炭土坑は鍛錬鍛冶用の炭を焼いたもので、別所・八橋両遺跡で出土している椀状鍛冶滓が近辺で精錬されたものではなく、鍛錬鍛冶を行うため鉄素材として外部から持ち込まれたものであるという想定も可能である。
- 4) 本書第5章第1節参照

《主要参考文献》

- 穴澤義功 2003「古代製鉄に関する考古学的考察」『近世たらら製鉄の歴史』丸善プラネット
 木立雅朗 1997「土師器焼成坑を定義するために」『古代の土師器生産と焼成遺構』窯跡研究会編
 大山町教育委員会他 2000『妻木晩田遺跡発掘調査報告書I~IV』
 鳥取県教育文化財団 2004『笠見第3遺跡』
 鳥取県教育文化財団 2004『八橋第8・9遺跡』
 淀江町教育委員会 2000『妻木晩田遺跡 洞ノ原地区・晩田山古墳群 発掘調査報告書』

写 真 図 版

P L A T E

図 版 目 次

松谷 中峰 遺跡

- PL. 1 1. 周辺の地形（南から）
2. 調査区全景（上が北）
- PL. 2 1. SI 1（東から）
2. SI 2（南から）—
3. SI 2 遺物出土状況（南から）
- PL. 3 1. SK 1（西から）
2. SK 2（西から）
3. SK 3（西から）
4. SK 4（上：完掘、下：遺物出土状況）
5. SK 5（南から）
6. SK 6（南から）
7. SK 7（東から）
- PL. 4 1. SK 8（南東から）
2. SK 9（北から）
3. SK 10（南から）
4. SK 11（北から）
5. SK 12（西から）
6. SK 13（北から）
7. SK 14（北から）
8. SK 15（東から）
- PL. 5 1. SK 16（東から）
2. SK 17（東から）
3. SK 18（東から）
4. SK 19（南から）
5. SK 20（北から）
6. SK 21（北から）
7. SD 1 遺物出土状況（西から）
- PL. 6 1. B区西側調査後撮影（北から）
2. B区中央部斜面調査後撮影（西から）
3. B区西側全体調査後撮影（東から）
- PL. 7 1. B区中央平坦部調査後撮影（南から）
2. A区南半部調査後撮影（東から）
3. 西トレンチ調査後撮影（南から）
- PL. 8 1. B区遺構内出土土器
2. B区遺構外出土土器
- PL. 9 石器・土製品

別所 中峯 遺跡

- PL.10 1. 遺跡周辺の地形（北から）
2. 八橋第8・9遺跡との位置関係（右が北）
- PL.11 1. SI 1（西から）
2. SI 1 遺物出土状況（西から）
3. SI 1 北東部床面直上遺物出土状況（北から）

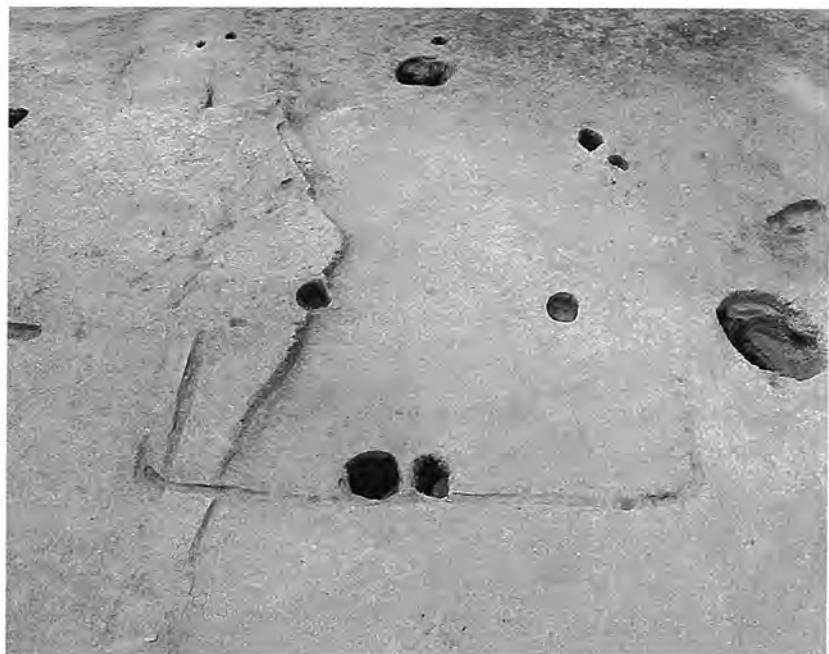
- PL.12 1. SI 2（東から）
2. SI 3（東から）
3. SI 3 遺物出土状況（東から）
- PL.13 1. SK 13 遺物出土状況（西から）
2. SK 13（西から）
3. SK 5（西から）
4. SK 1（西から）
5. SK 2（西から）
- PL.14 1. SK 3（西から）
2. SK 4（東から）
3. SK 6（北から）
4. SK 7（南から）
5. SK 8（東から）
6. SK 10（東から）
7. SK 11（北から）
8. SK 9（東から）
- PL.15 1. SK 12（北から）
2. SS 1（南から）
3. 調査後航空撮影（右が北）
- PL.16 1. SI 1 出土土器
2. SI 3 出土土器
- PL.17 1. SK 13 出土土器 1（注口土器）
2. SK 13 出土土器 2
- PL.18 1. SK 13 出土土器 3
2. 遺構内出土土器
- PL.19 1. SD 2 出土土器
2. 遺構外出土土器 1
3. 遺構外出土土器 2
- PL.20 1. 鉄関連遺物
2. 石器
- PL.21 焼土薄片（1）
1. SK 1 西壁南側壁面
2. SK 1 地山
3. SK 3 東壁下部（還元焼成）
4. SK 3 地山
- PL.22 焼土薄片（2）
5. SK 6 底面中央部
6. SK 6 地山
7. SK 11 北壁東側
8. SK 11 地山
- PL.23 槌形滓の顕微鏡組成



1. 周辺の地形（南から）



2. 調査区全景（上が北）

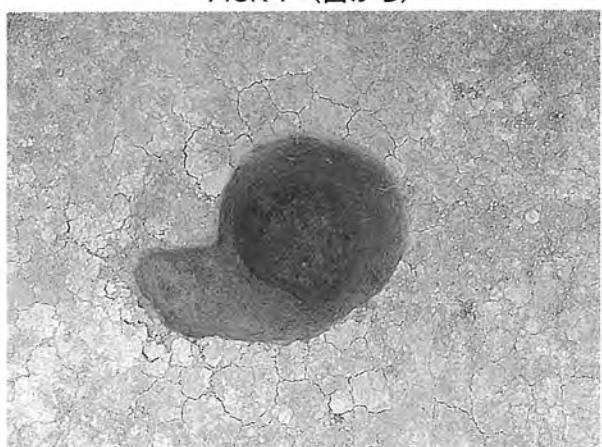




1.SK 1 (西から)



2.SK 2 (西から)



3.SK 3 (西から)



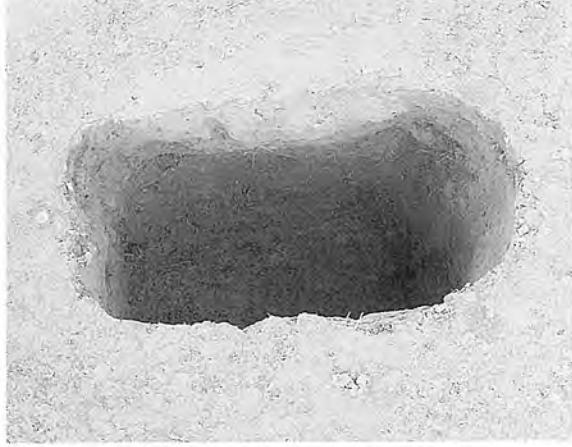
5.SK 5 (南から)



4.SK 4 (上 : 完堀、下 : 遺物出土状況)



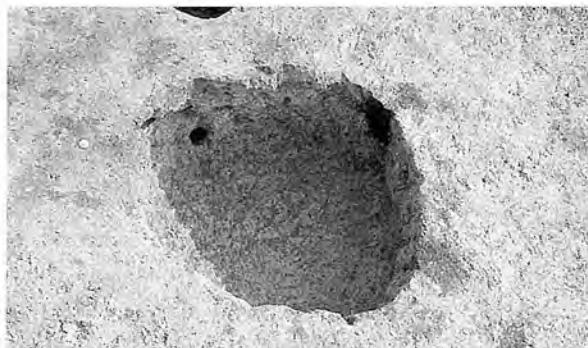
6.SK 6 (南から)



7.SK 7 (東から)



1.SK8 (南東から)



2.SK9 (北から)



3.SK10 (南から)



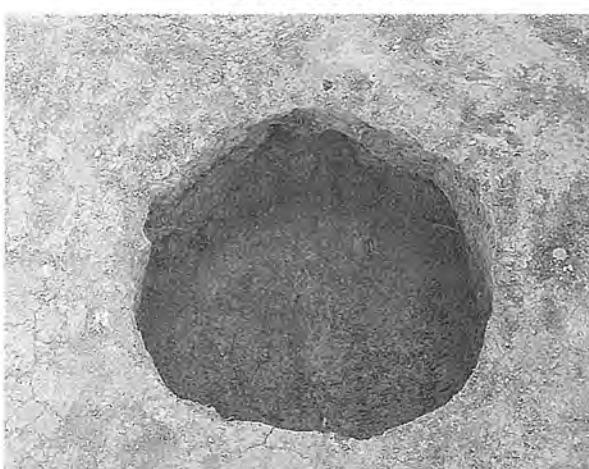
4.SK11 (北から)



5.SK12 (西から)



6.SK13 (北から)



7.SK14 (北から)



8.SK15 (東から)



1.SK16 (東から)



2.SK17 (東から)



3.SK18 (東から)



4.SK19 (南から)



5.SK20 (北から)



7.SD1 遺物出土状況 (西から)



6.SK21 (北から)



1. B区西側調査後撮影（北から）



2. B区中央部斜面調査後撮影
(北から)



3. B区西側全体調査後撮影
(東から)



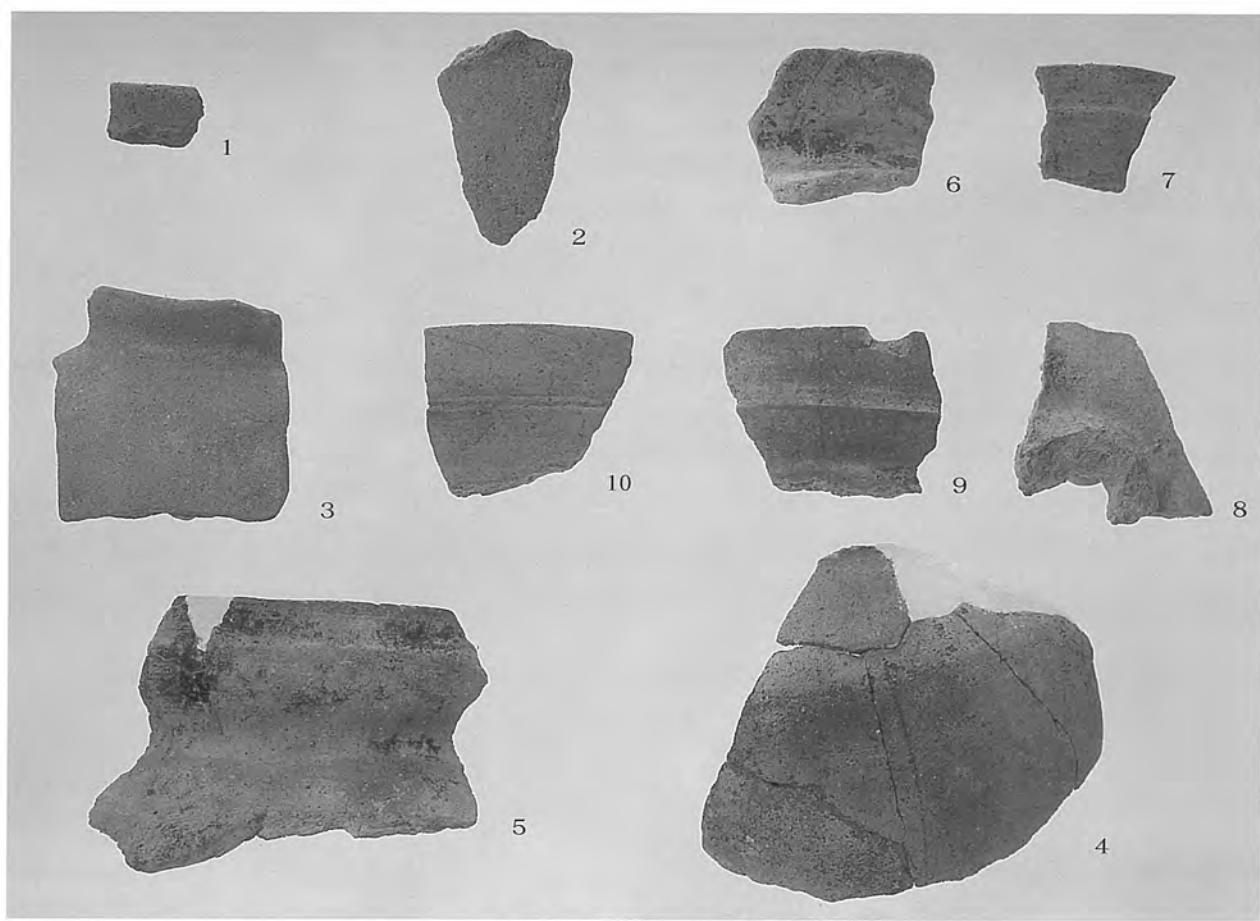
1. B区中央平坦部調査後撮影
(南から)



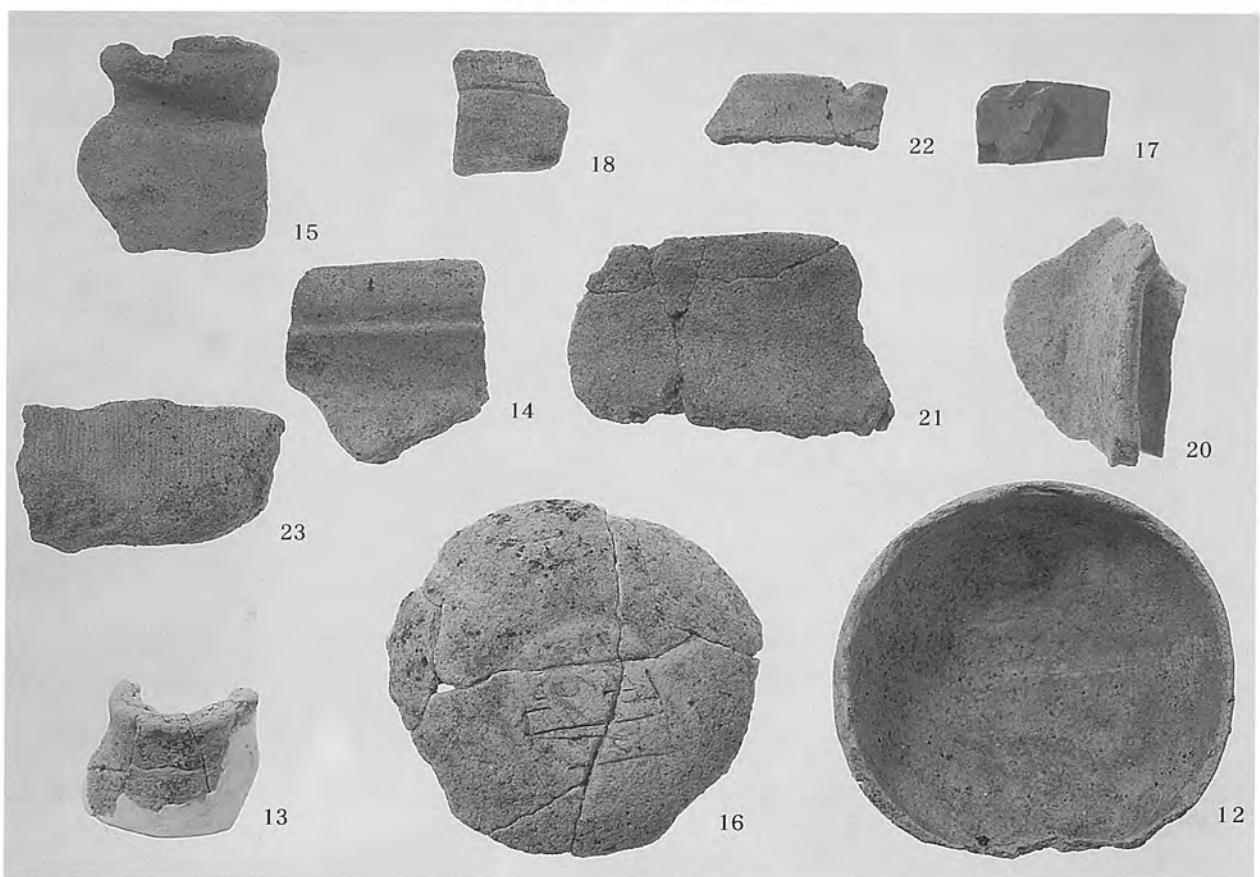
2. A区南半部調査後撮影
(東から)



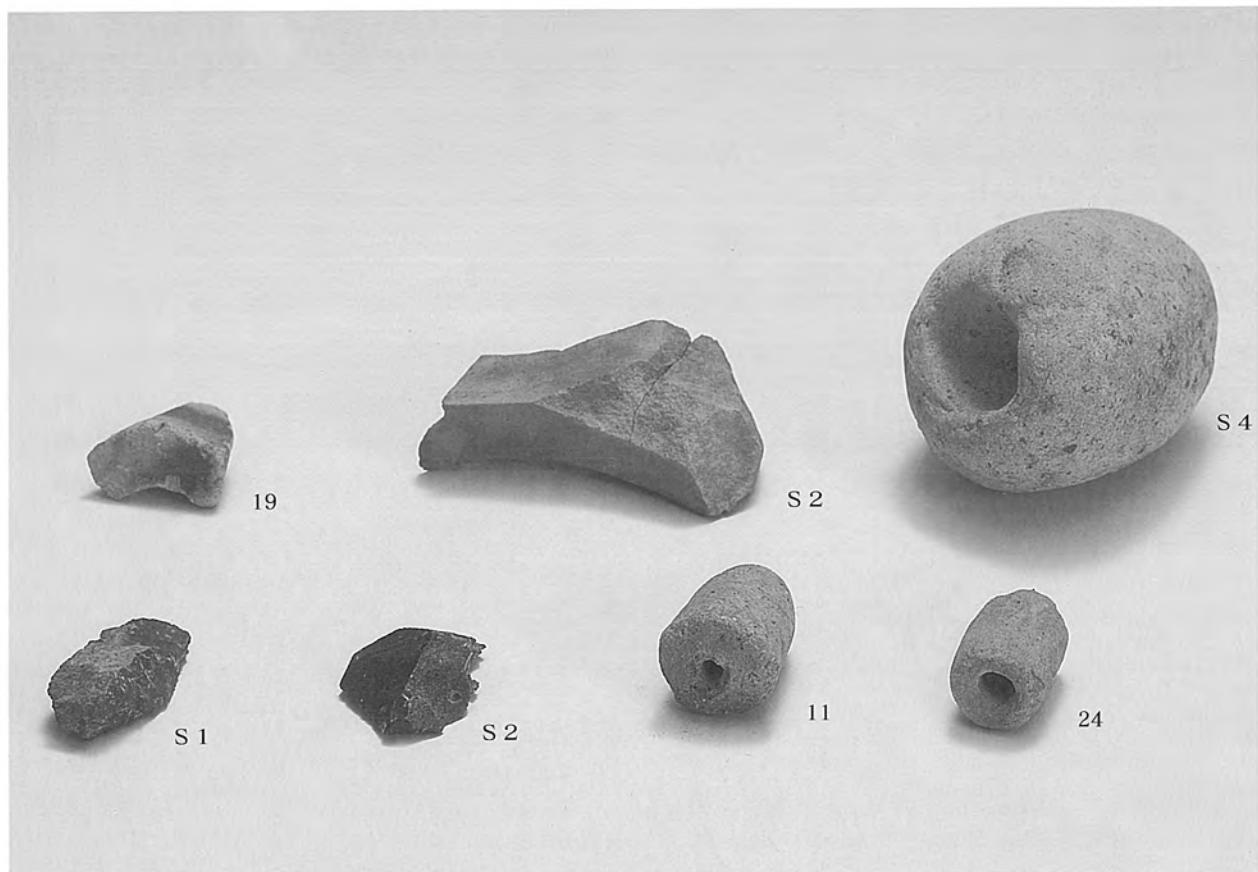
3. 西トレンチ調査後撮影
(南から)



1. B区遺構内出土土器



2. B区遺構外出土土器



石器・土製品



1. 遺跡周辺の地形（北から）：上
2. 八橋第8・9遺跡の位置関係
(右が北)：右





1.SI 1 (西から)



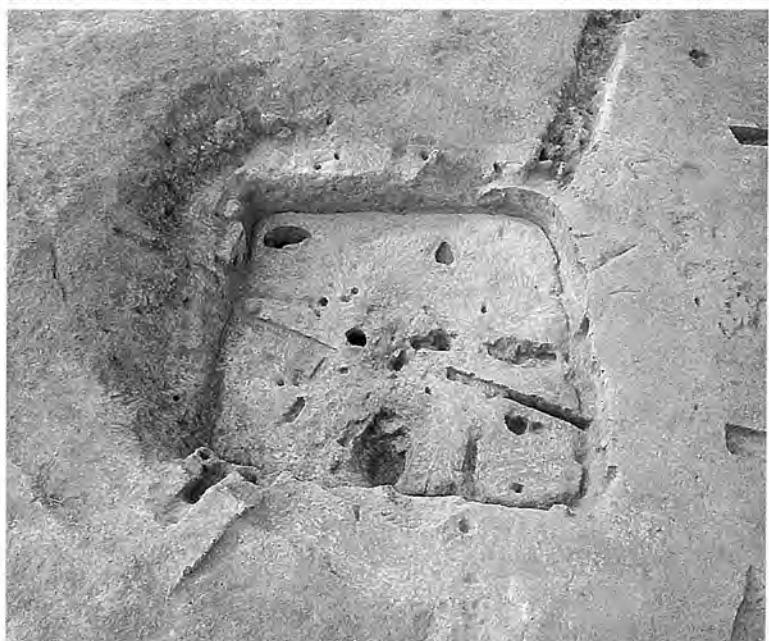
2.SI 1 遺物出土状況 (西から)



3.SI 1 北東部床面直上遺物出土状況
(北から)



1.SI2 (東から)



2.SI3 (東から)



3.SI3 遺物出土状況 (東から)



1.SK13遺物出土状況（西から）



2.SK13（西から）



3.SK5（西から）



4.SK1（西から）



5.SK2（西から）



1.SK3 (西から)



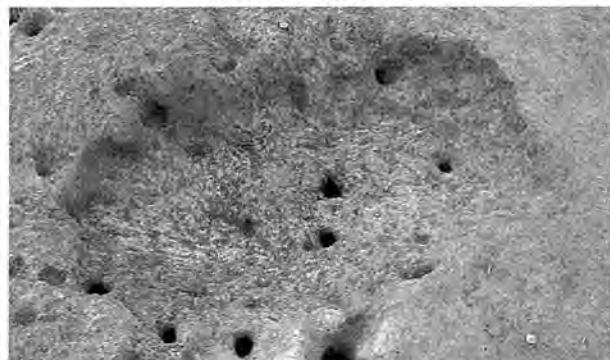
2.SK4 (東から)



3.SK6 (北から)



4.SK7 (南から)



5.SK8 (東から)



6.SK10 (東から)



7.SK11 (北から)



8.SK9 (東から)



1.SK12 (北から)



2.SS 1 (南から)



3.調査後航空写真 (右が北)



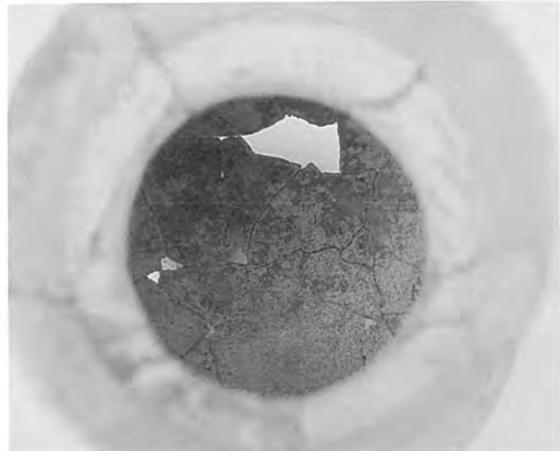
1.SI1 出土土器



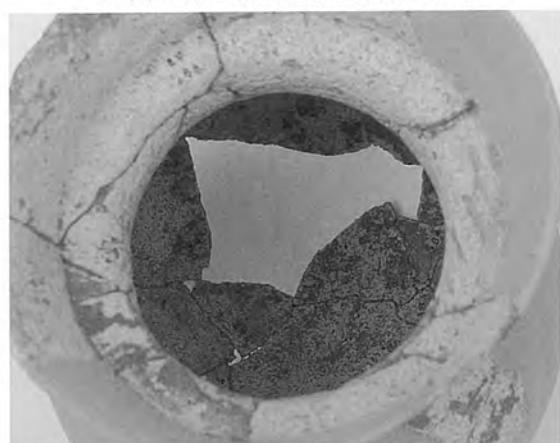
17



2.SI3 出土土器



注口土器底部赤色物質沈着状況



分析用サンプル採取後

1.SK13出土土器1（注口土器）



22

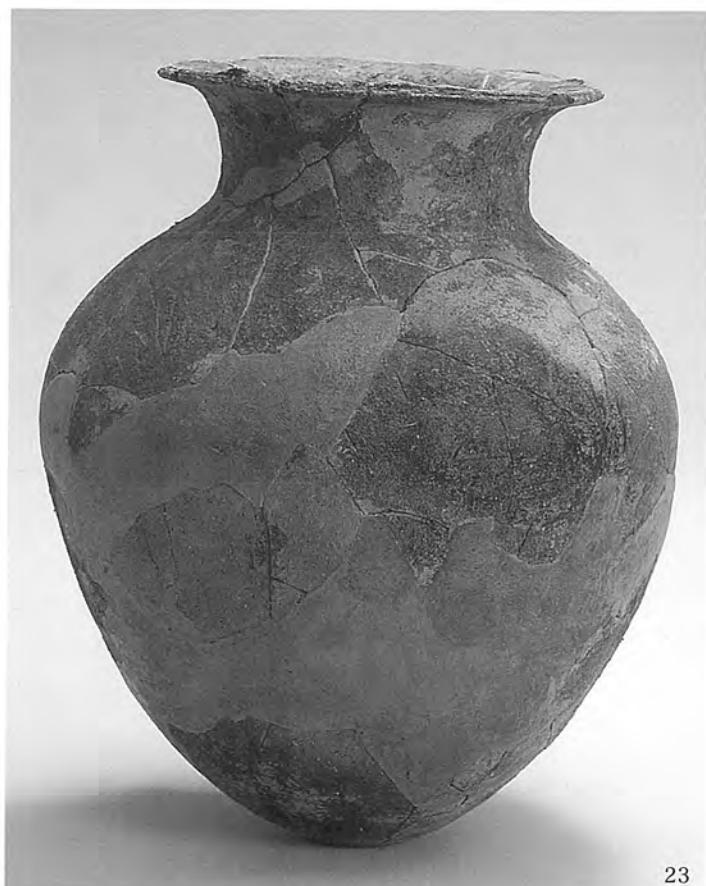


25

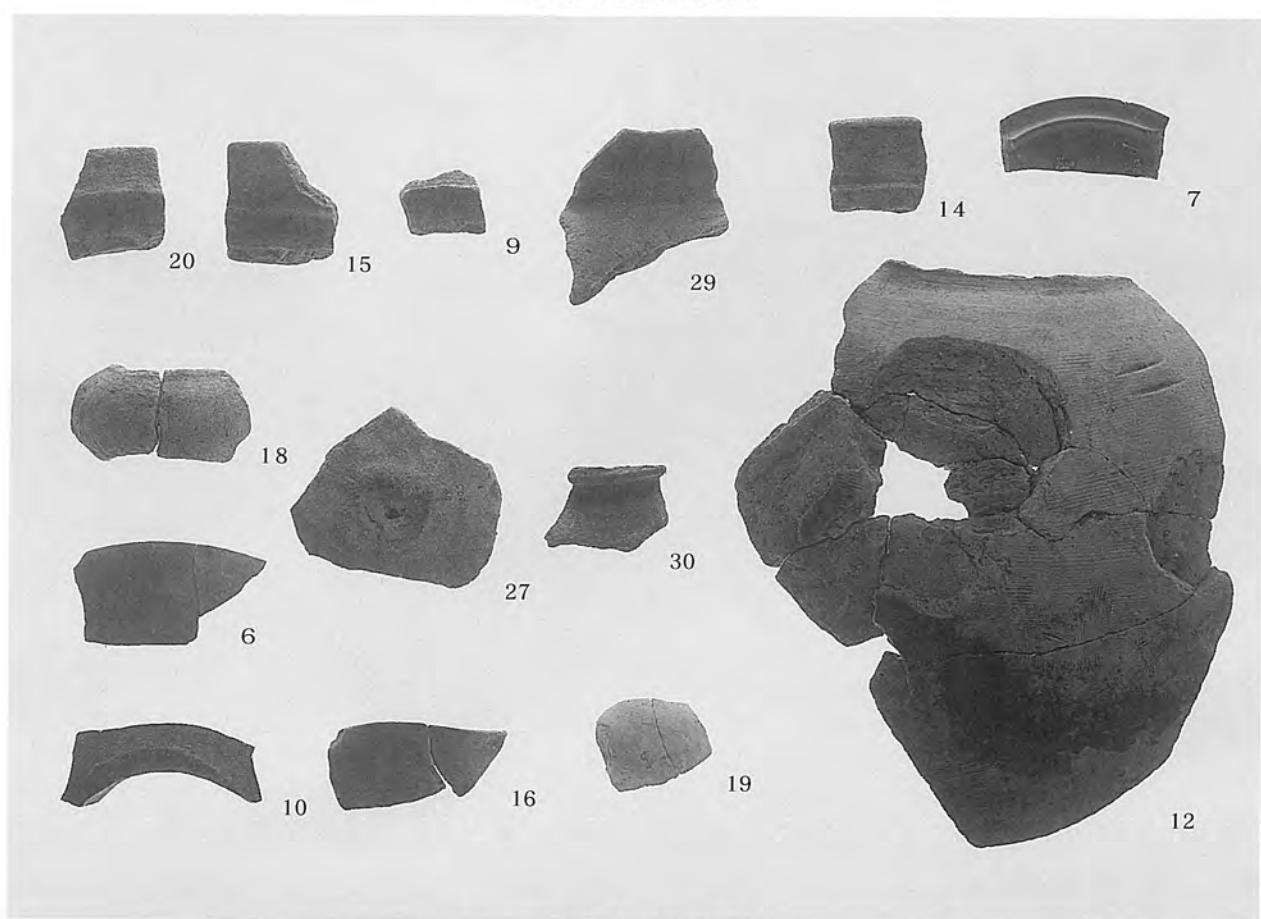


26

2.SK13出土土器2



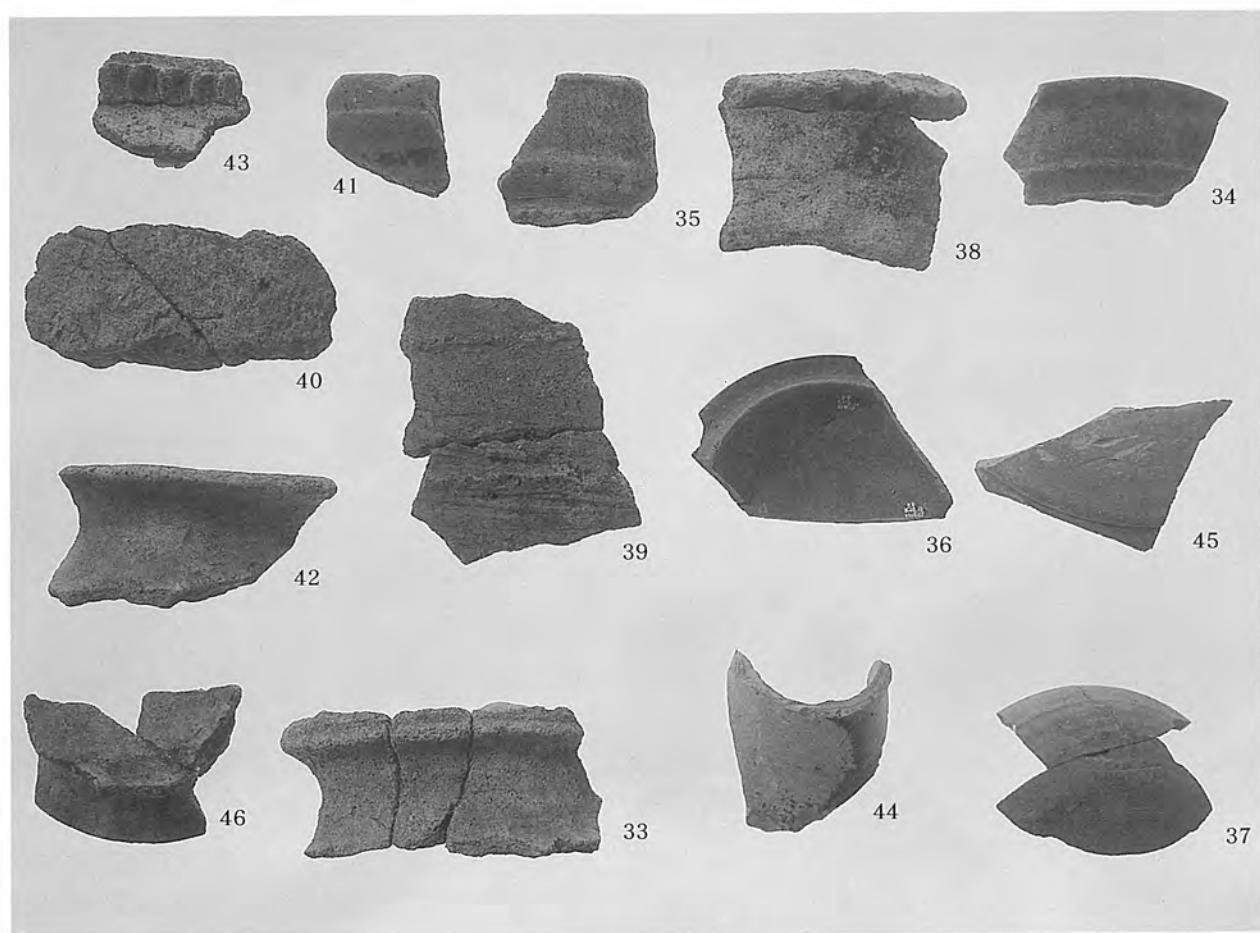
1.SK13出土土器3

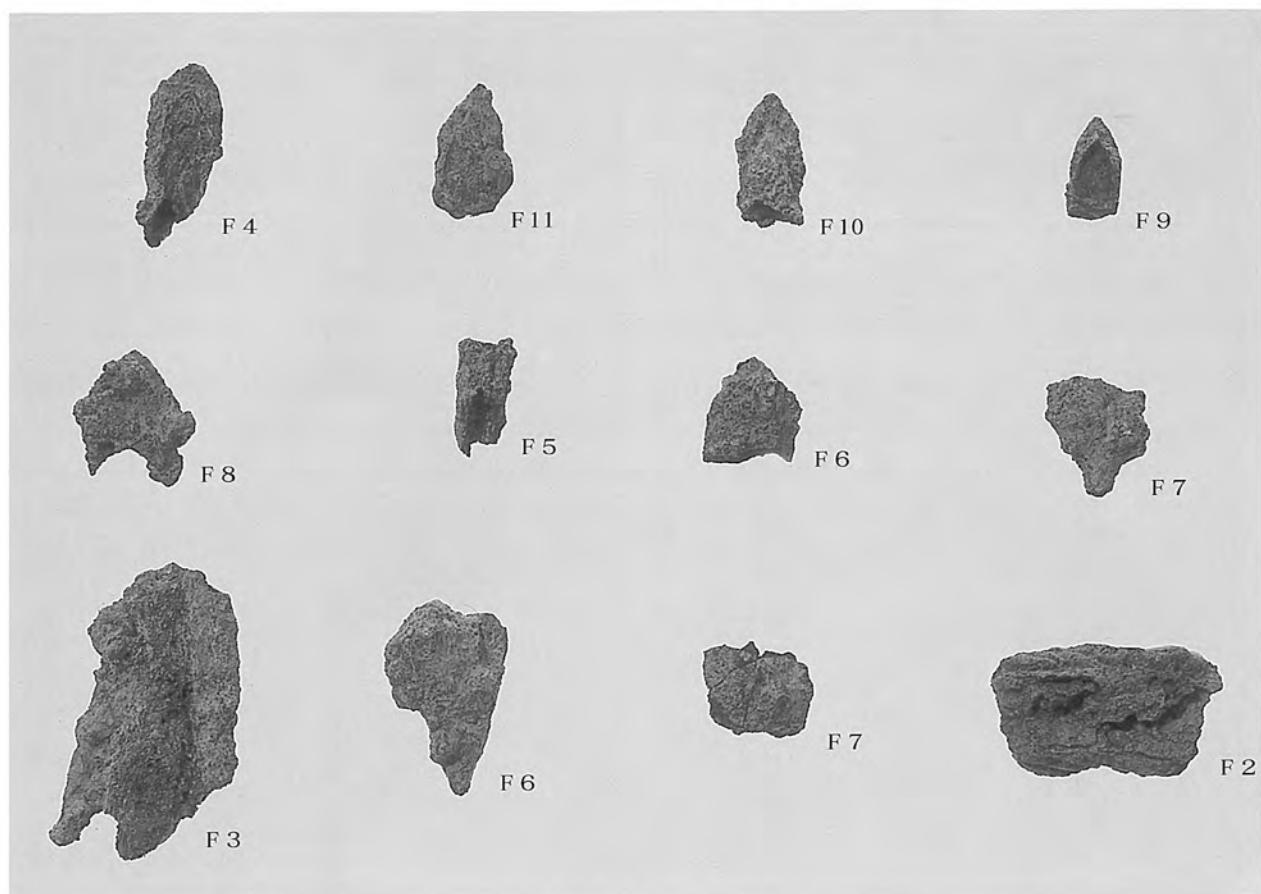


2.遺構内出土土器

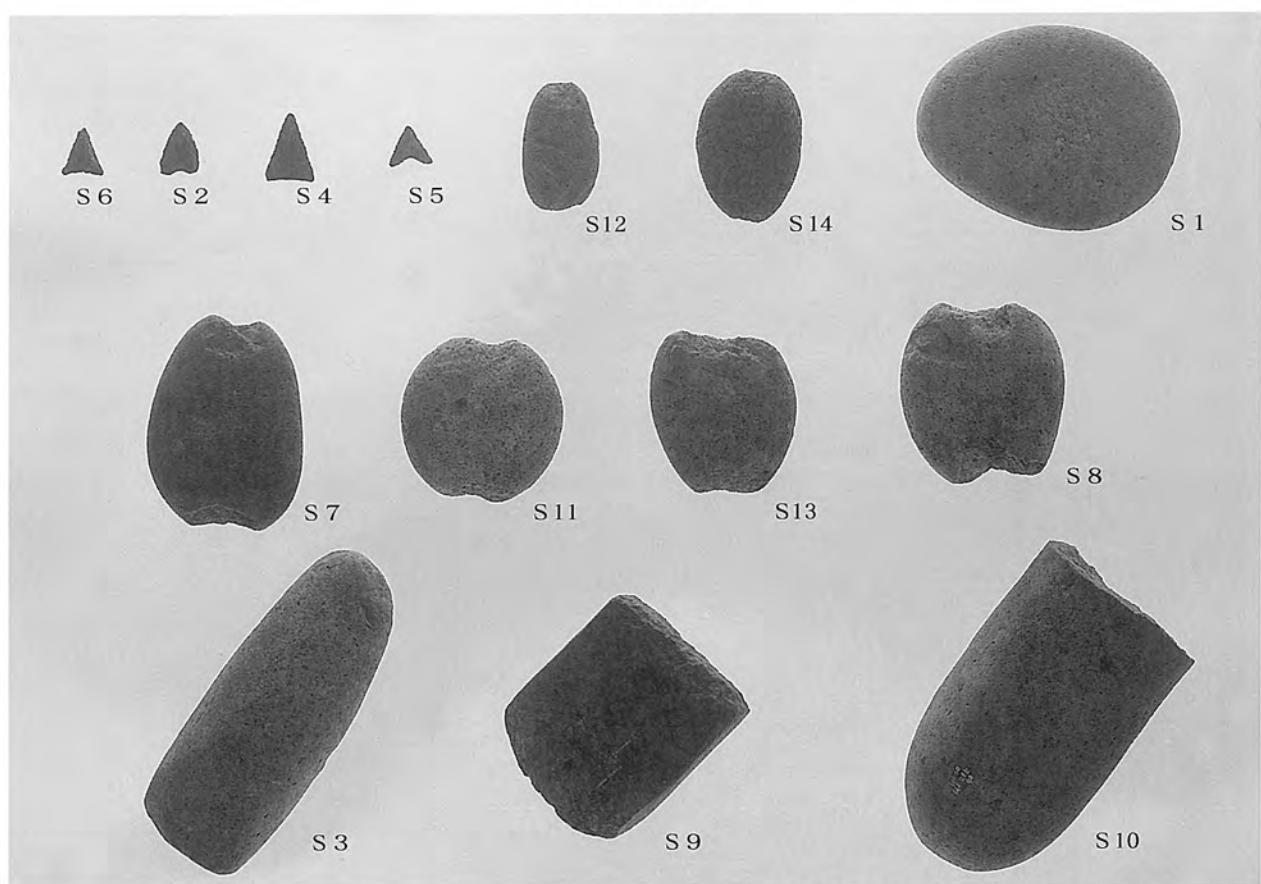


1. SD2出土土器（左）
2. 遺構外出土土器1（上）



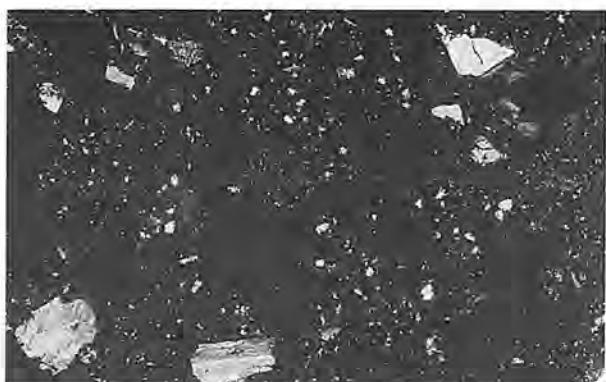
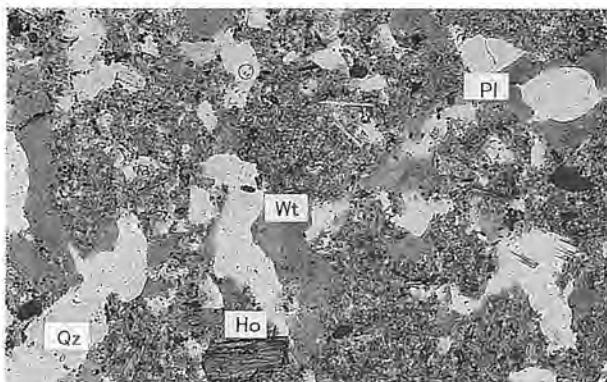


1. 鐵関連遺物



2. 石器

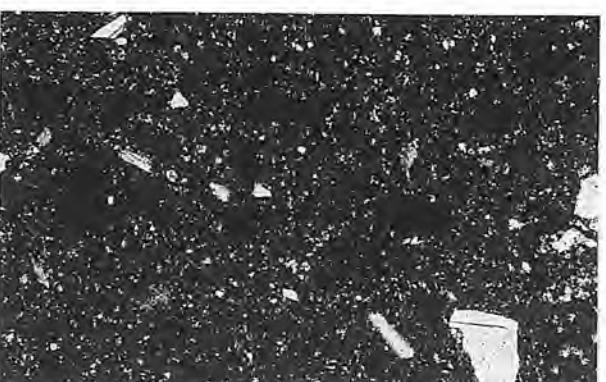
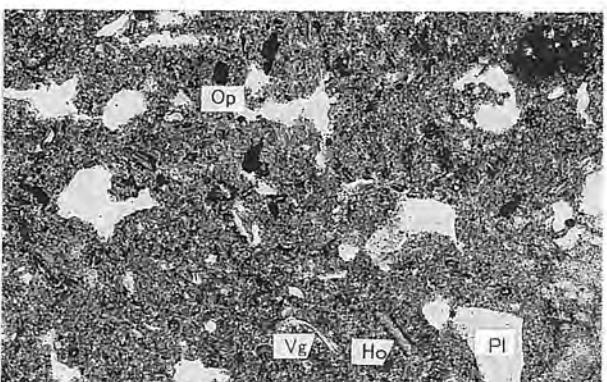
焼土薄片 (1)



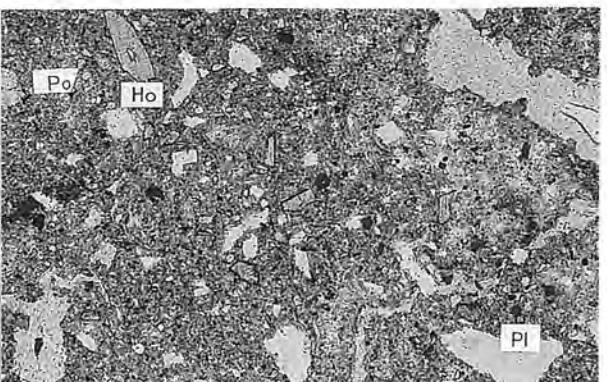
1.SK1 西壁南側壁面



2.SK1 地山



3.SK3 東壁下部(還元焼成)



4.SK3 地山

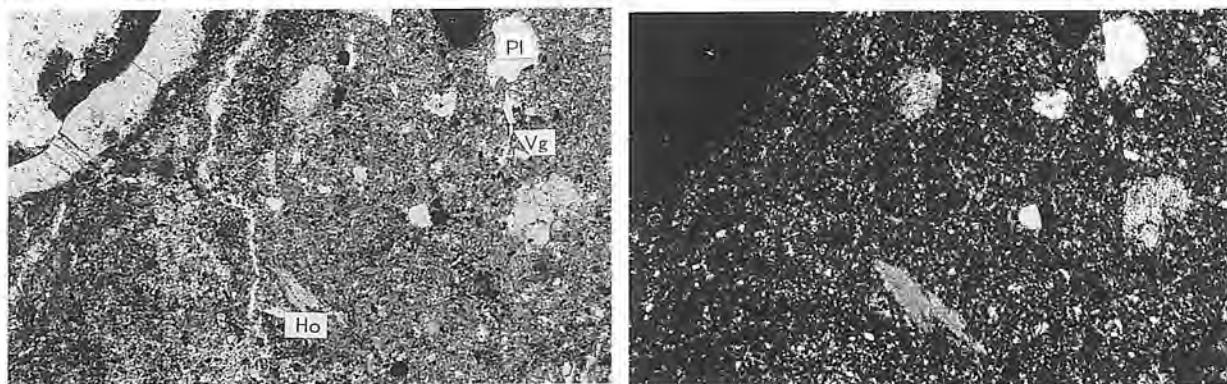
Qz: 石英, Pl: 斜長石, Ho: 角閃石, Op: 不透明鉱物.

Wt: 溶結凝灰岩, Vg: 火山ガラス, Po: 植物珪酸体.

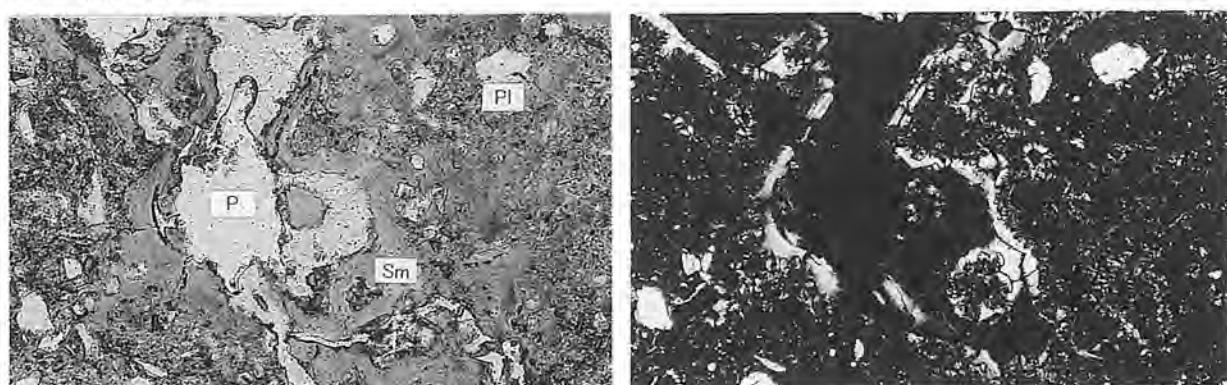
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

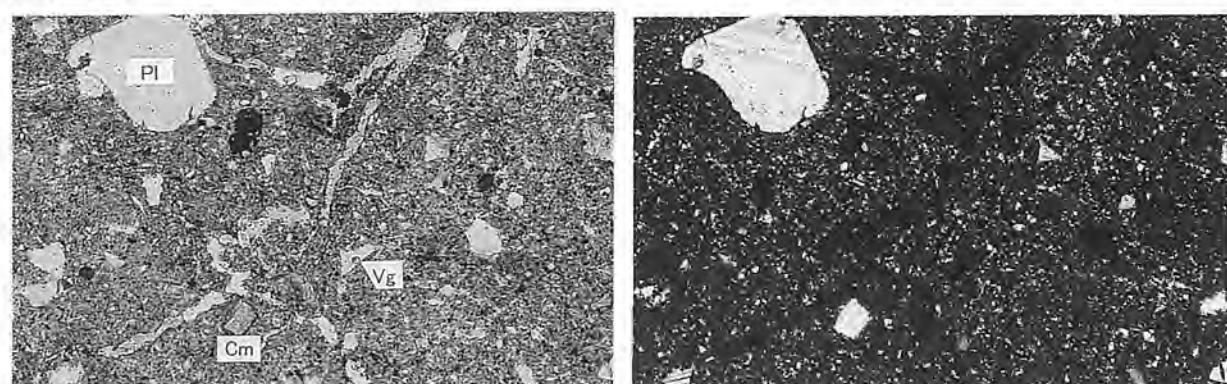
焼土薄片 (2)



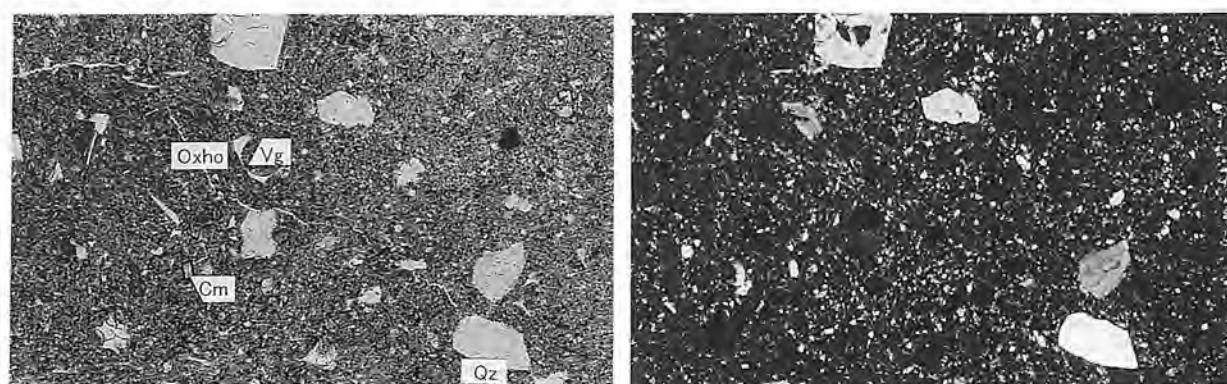
5.SK6 底面中央部



6.SK6 地山



7.SK11 北壁東側



8.SK11 地山

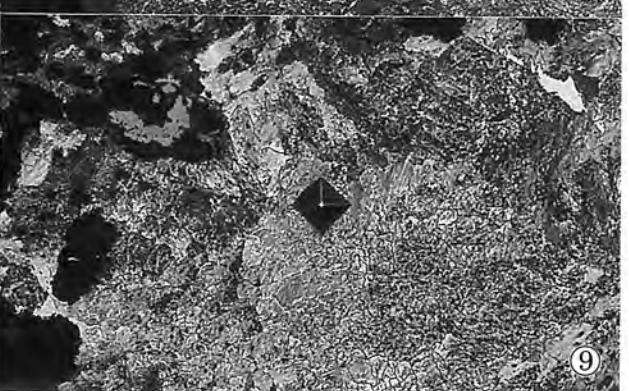
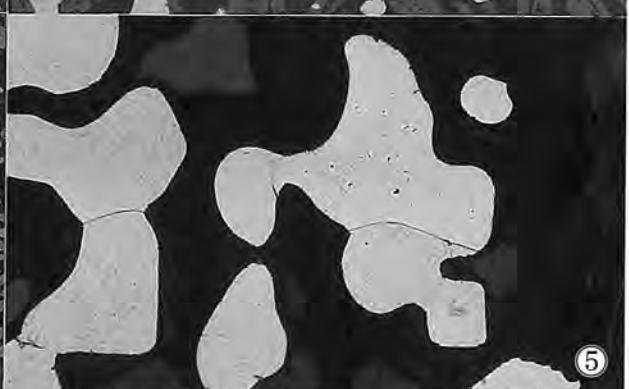
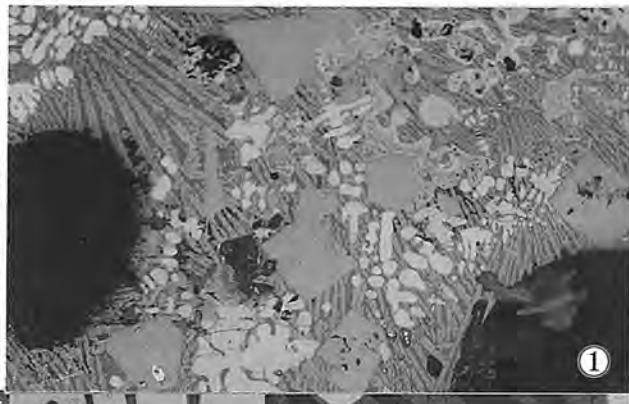
Qz: 石英, Pl: 斜長石, Ho: 角閃石, Oxho: 酸化角閃石,
Cm: カミングトン閃石, Vg: 火山ガラス, Sm: スメクタイト, P: 孔隙
写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

0.5mm

BEN-1

楕形津

- ①×100試料下面:ヘシライト・ウスタイト・ファイアライト
- ②×100、③×400:ウスタイト(粒内微細晶出物)・ファイアライト
- ④～⑨:金属鉄、ナイタルetch
- ④×100、⑤×400:フェライト・パーライト
- ⑥×100、⑦×400:初析フェライト・パーライト
- ⑧、⑨×200硬度:⑧83Hv, ⑨226Hv



報告書抄録

ふりがな	まつたになかみねいせき・べっしょなかみねいせき							
書名	松谷中峰遺跡・別所中峯遺跡							
副書名	一般国道9号（東伯中山道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次	VII							
シリーズ名	鳥取県教育文化財団調査報告書							
シリーズ番号	91							
編著者名	鍋倉和行、大野哲二、福井流星、淺田康行、岩井美枝、原あづさ							
編集機関	財団法人鳥取県教育文化財団 埋蔵文化財センター							
所在地	〒680-0151 鳥取県岩美郡国府町宮下1260 Tel.0857-27-6717							
発行年月日	西暦2004年（平成16年）3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード	北緯	東経	調査期間	調査期間	調査原因	
市町村	遺跡番号							
松谷中峰遺跡	とうはくぐんあかさきらようおおあざまつに 東伯郡赤崎町大字松谷 あざなかみね 字中峰543ほか	31368	139	35° 30' 18"	133° 39' 5"	20030428 ～ 20030626	7,473m ²	一般国道9号 東伯中山道路 改築工事
別所中峯遺跡	とうはくぐんあかさきらようおおあざべっしょ 東伯郡赤崎町大字別所 あざなかみね 字中峯655-1	31368	138	35° 29' 59"	133° 39' 34"	20030801 ～ 20031031	3,175m ²	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
松谷中峰遺跡	集落	古墳時代中期	竪穴建物跡			土師器、須恵器、 土製品		
	その他	時期不明	土坑、溝状遺構					
別所中峯遺跡	その他	縄文時代前・ 中・晚期	土坑			縄文土器		
	集落	弥生時代末～ 古墳時代前期	竪穴建物跡、土坑			土師器、鉄器	儀礼跡、注口土器 底面に赤色物質	
	その他	時期不明	土坑、段状遺構、 溝状遺構			炭化物	製炭土坑	

鳥取県教育文化財団発掘調査報告書 91
一般国道9号（東伯中山道路）の改築工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ

鳥取県東伯郡赤崎町

松 谷 中 峰 遺 跡 別 所 中 峯 遺 跡

発 行 2004年3月31日

編 集 財団法人 鳥取県教育文化財団
埋蔵文化財センター
〒680-0151 鳥取県岩美郡国府町宮下1260
電話 (0857) 27-6717

発行者 財団法人 鳥取県教育文化財団
〒680-0061 鳥取県鳥取市立川町6丁目176
電話 (0857) 20-3686

印 刷 富士印刷株式会社